

第5回講義(20160527)

- § 1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：
- § 2 相対主義とは何か？
- § 3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義
- § 4 Davidsonによる概念枠相対主義への批判

§ 5 パラダイムの共約不可能性と Davidson の概念枠批判の関係の考察

(前回最後に「以上のデイヴィドソンの論証を、パラダイム論に適用してみよう」で述べた個所を詳しく論じ直した。)

1 「パラダイムの共約不可能性の理由」4点について

対抗関係にあるパラダイムが共約不可能である理由を、ドッペルトは次の4点にまとめていた。

- ①同じ科学言語で語られていないこと、
- ②同じ観察データが提出されたり、承認されたりあるいは知覚されたりしないこと、
- ③同じ問いに答えたり、同じ問題を解いたりすることに関心がないこと、
- ④十全な説明あるいは正当な説明とさえみなされるものが同じ仕方で解釈されないこと

・①について：デイヴィドソンの議論が正しければ、翻訳不可能な異なる科学言語が存在しないことになるだろう。(後で考察する。)

・②について：観察の理論負荷性の議論では、②は①から帰結する。従って、科学言語の相違は、知覚や知覚報告の相違をもたらす。言い換えると、概念枠組みの相違は、知覚報告の相違をもたらす。この議論が正しければ、言語の相違を拡大して、意見の相違(知覚報告の相違)を縮小することはできない。

この議論は、デイヴィドソンが「部分的翻訳不可能性」を批判するときの論証と矛盾するようにみえる。前回次のように述べた。

他者の発話を承認できないとき、この対立の原因として次の二つが考えられる。

言語(概念枠)の違い

意見の違い

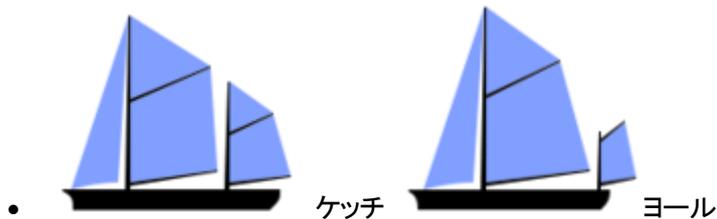
このどちらにすべきかの、基準は存在しない。つまり、意見の違いが、概念枠の違いに帰される場合にも、それを意見の違いに帰することが可能である。したがって、<言語(概念枠)の違いと意見の違いを区別できない>。したがって、<部分的な翻訳不可能性を明確に指摘することはできない>。

デイヴィドソンの議論ではケッチとヨールの話が例に上がっていた。私が前回あげた例は次のものである。中国や韓国の儒教では、「孝」は「忠」に優先する。しかし日本では「忠」が「孝」に優先する。このとき、「孝」と「忠」の概念理解が異なるのか、それともそれらは同じ概念であるが、それらを適用する人間関係についての理解が異なるのか、これの区別ができない。

この二つの主張(観察の理論不可能性の主張と、部分的に翻訳不可能な言語は存在しないという主張)は、どちらも正しいように見えるが、しかし互いに矛盾する主張のように見える。

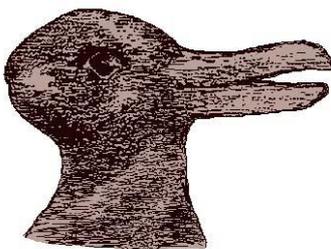
以下「ケッチ」 in Wikipedia より

ケッチは、しばしばヨールと混同される。両者の違いは、ケッチの場合は推進力を得るためにミズンマストが舵の前にあることが挙げられる。ヨールの場合はミズンマストは船尾にあり、バランスを取るのに使用される。これは形状というより、用途の違いである。



さて、右はケッチでしょうか、ヨールでしょうか。

デイヴィドソンの議論では、概念理解、知覚、知覚報告の3つが登場する。知覚報告が異なるときに、概念理解が異なるのか、知覚が異なるのか区別できないという主張である。観察の理論負荷性では、知覚（+知覚報告）と概念の二つが登場する。



アヒルとウサギの反転図形

「これはウサギだ」「これはアヒルだ」、どちらに見えるか（どちらの報告になるか）は、私たちがもっている概念（ないし理論）に依存する。

観察の理論負荷性から帰結することは、理論から中立的な観察は存在しないので、＜観察（観察報告）によってどちらの理論が優れているかを決定することはできない＞ということである。

デイヴィドソンの主張は、＜観察報告の違いから、概念理解が異なるのか、知覚が異なるのかを、決定することはできない＞ということであった。デイヴィドソンは、概念報告から中立的な観察報告がない、ということ認めるだろう。

・③について：デイヴィドソンは、＜概念枠組みが異なるとき問いが異なる＞、という論点を検討していなかった。（これは後に議論）

・④について：デイヴィドソンは、これを認めるだろう。しかしそれゆえに、概念枠が異なるのか、意見が異なるのか、区別できないことを主張し、概念枠が存在しないという。しかし、このようなデイヴィドソンの議論は、二つの競合する科学理論の比較不可能性を認めることになってしまうのではないだろうか。

2 概念枠相対主義に関する超越的な立場と内在的な立場（上記①に関連して）

*クーンは超越的な立場から論じている

クーンのパラダイム論は、科学史研究から生まれており、歴史上の科学理論（パラダイム）を、超越的な中立的な立場から、その比較不可能性を論じているように思われる。

*デイヴィドソンによる超越的な概念枠相対主義への批判

「概念相対主義の支配的隠喩、すなわち複数の異なる視点の隠喩は、その基礎にあるパラドクスを暴露しているように思われる。異なる視点が意味をもつのは、それらの視点が記入される共通の座標系が存在する場合だけでしかない。ところが、共通の座標系の存在は、劇的な比較不可能性の主張に背くことになる。」193

つまり、＜二つの異なる視点の存在を主張するためには、それらを比較する共通の座標系が必要になる。しかし、それは比較不可能性の主張に矛盾する＞ということである。

言い換えると、この主張は、＜競合する二つの概念枠を比較できる超越的な中立的視点は存在しない＞という主張である。

デイヴィドソンは、もし超越的な立場を取れたら、概念枠相対主義は可能かもしれないが、そのような立場には立てないと主張する。

*デイヴィドソンによる内在的な概念枠相対主義への批判

他方で、デイヴィドソンは、もし内在的な立場に立つなら、概念枠相対主義は、成り立たないことしめした。つまり自分とは異なる概念枠（翻訳できない言語）であるが、概念枠（言語）であるようなものは存在しないと主張した。

全面的に翻訳不可能な言語の存在については、英語話者が、＜冥王星語が、翻訳不可能であるけれども言語である＞ということを知ることができるかどうかを検討して、「否」という。

部分的に翻訳不可能な言語の存在については、「ケッチとヨールの話」で、友人の発話「ヨールだ」を聞いた者（それをケッチだと思っている者）が、概念理解の違いなのか、知覚の違いなのか、判定できないという議論をおこない、部分的に翻訳不可能であると言いきれないことを示した。

3 概念枠相対主義は、経験論批判か、それとも経験論か？

・パラダイムの共約不可能性と観察の理論負荷性は、自然科学の経験的実証性を批判するものであった。これは論理実証主義に対するクワインの批判と似ていた（クーンはクワインの「二つのドグマ」を読んでおり、その影響を受けていると思われる）。概念枠相対主義は、経験主義批判という意味を持っていた。

・これに対して、デイヴィドソンは、概念枠と内容の二元論が、経験論の第三の最後のドグマであるとい

う。したがって、デイヴィドソンの概念枠相対主義批判は、経験論批判であった。

・この矛盾は、どうして生じるのだろうか？

*経験論の3つのドグマはどういう関係にあるのか。

①分析的真理／総合的真理の区別

②還元主義（理論や複合文の真理値を、観察報告や要素文の真理値に還元）

③枠組み・内容区別

①を否定しても、③が維持可能であるというのが、ここでのデイヴィドソンの主張である

*経験論の第三のドグマとしての概念枠と内容の区別について

クーンは、概念枠相対主義を主張することによって、経験論を批判した。デイヴィドソンは、概念枠を認めること自体に、まだ経験論の要素が残っており、それを経験論の第三のドグマと呼ぶ。

*分析と総合の区別を放棄しても、概念枠と経験的内容の二元論は存続する

「意味と分析性を放棄しても、概念枠を具現する言語という考えを保持することは可能である。それゆえ、分析と総合の二元論の代わりに概念枠と経験的内容との二元論が獲得されることになる。この新しい二元論は、分析と総合の区別や還元主義という支持しがたいドグマを取り除かれた、つまり、各文ごとに経験的内容を一義的に割り当てることが出来るという実現不可能な考えを取り除かれた、経験論の基礎なのである。」 訳 200

分析総合の区別を放棄することは、意味のみによって真となるものを放棄することであり、意味を放棄することである。しかし、「意味と分析性を放棄しても、概念枠を具現する言語という考えは、保持可能である。」 200

*第三のドグマ、最後のドグマ

「私は、枠組と内容、組織化するシステムと組織化を待つなにか、というこの第二の二元論が、了解可能にも擁護可能にもなりえないことを力説したい。それは、それ自体ひとつのドグマ、経験論の第三のドグマなのである。これを放棄してもなお何かははっきりと経験論と呼べるものが残るか明らかではないから、これは第三のドグマであるとともに、おそらくは最後のドグマでもある。」 201

デイヴィドソンは、経験論をとらない。クーンの言うパラダイムが互いに翻訳可能であり、共約可能であり、比較可能であるとするが、しかし他方で、経験論をとらないので、つまりクワインと同様に経験によって理論をテストできることを認めないので、私たちはパラダイムの優劣を経験によって判定することはできない。

しかし、デイヴィドソンは、プラグマティズムを主張するのでもない。それでは、理論の選択は何によって行われるのだろうか。

注1：「科学は進歩している」と言える。

私たちはこのように言えるだろう。しかし、パースやポパーが考えたように「科学は次第に真理に接近している」という意味ではない。それは「科学は生活により役立つようになっている」という意味である。

（大庭健が指摘しているように）「より役立つ」ということは、私たちの欲望に依存しており、私たちの欲

望は自然なものではなくて文化的に構成されたものである。そこから大庭健は科学が進歩しているとは言えないと主張する。これは正しいだろう。しかし他方で、「私たちの現在の文化にとって、科学はより有用になっている」といえるだろう。つまり、文化相対的な発言としては、「科学は進歩している」を認めることができる。

注2：フィヒテによる「観念論」と「实在論」の共約不可能性論（『知識学の第一序論』）

<両者は、同じ言葉を使っているが、異なる意味で用いるので、理論的にどちらが正しいかを決定できない>ということをフィヒテは述べて、彼自身は観念論を採用することを述べる。このとき、フィヒテはどちらの立場の説明も理解していると考えている。しかし、いずれが優れているかを理論的に決定できないと考えている。彼が二つの立場を理解するとき、彼はどの立場にいるのだろうか。彼は、超越的な中立の立場にいるのだろうか。同時に反転図形の例でいえば、彼はウサギとアヒルを同時に見ることはできないが、ウサギも見えるしアヒルも見える。デイヴィドソンが批判するのは、ウサギとアヒルを同時に見る超越的で中立的な立場である。しかし、立場交換によって、どちらも見ることはできるのではないか。

注3：デイヴィドソンは、翻訳の失敗を示すためには、少なくとも翻訳可能な部分がなければならないという。

「われわれが翻訳の失敗を確信できるのは、それが十分に局所的なときである。」というのは、一般的な翻訳の成功という背景のもとで、失敗を理解可能にするのに必要なものが、準備されるからである。」

204

それゆえに、かれは全面的な翻訳不可能性を認めない。ところで、部分的な翻訳の失敗は、部分的な翻訳の原理的な不可能性を示すことではないだろう。

翻訳の部分的な失敗があっても、原理的には翻訳可能であることをどうやって示すのだろうか。